

昭和49年1月8日(火) 時事解説 第3種郵便物認可

林彪、陳伯達、劉少奇などといった「現代中國の孔子」を批判し、これら「尊孔派」の反動的役割を糾弾するというたてまえで、去る八月の中国共産党第十回全国代表大会（十全大会）直前から開始された中国の「孔子批判・秦始皇評価」のキャンペーンは、ますます激しいトンで高まっている。

その様相は、あたかも文化大革命初期のころを思わせるものがある、注目されるのは、最近その重点が、孔子批判よりもむしろ、秦始皇礼

と文化部門に大量にもぐり込んだ儒生たち」の「反動的役割」を糾弾し、同時に、これら儒生たる社会的基礎を論ず」（同・十一号）の二つの論文である。

◆

中嶋嶺雄（東京外国语大学助教授）

孔子・始皇帝・現代中国

◆

すなわち、秦王朝内部にもぐり込んだ儒生たちと、始皇帝がサポートした法家の賢者たちとの闘争、いわゆる復辟（ふくへき）と反復辟との闘争に力点が移ってきたようであり、反動的な儒生どもは、先進的な秦王朝を内部からくつがえして、奴隸制への復辟をはからうとしたと糾弾されているのである。そしてこの場合、たとえば最近の中国共産党

機関紙「紅旗」に掲載された二つの重要論文は

とくに注目されなければならないだろう。すな

わち、石渝の「尊儒反法を論ず」（一九七三年・第十号）、および羅思鼎の「秦王朝設立過程での復辟と反復辟の闘争——あわせて儒法論争の

社会的基礎を論ず」（同・十一号）の二つの論文である。

◆

これらの論文はともに、「秦王朝の政府機関と文化部門に大量にもぐり込んだ儒生たち」の「反動的役割」を糾弾し、同時に、これら儒生たる社会的基礎を論ず」（同・十一号）の二つの論文である。

ここまで述べてみると、十全大会をめぐっての「潮流と反潮流」の角逐や、林彪異変以来ますます顕著になつた“脱・文革”的潮流との関連で、今回のキャンペーンが「政府機関・文化部門」に大きな地位を占めている周恩来路線への、『王朝派』の激しい抵抗と批判ではないかという推測が、論理的にも整合していくことは否めない。

しかも、林彪異変に関連した『陰謀計画の書』として公式に流布されている「八五七一工程」紀要が、しばしば一連の論文で言及されている。「二つの路線の闘争」に、それを結びつける。

この「紀要」には周知のように、毛沢東主席を秦始皇同様の「專制暴君」だとなじった文章があるだけに、『王朝派』としては、そのような始皇帝像を全面的に転換させる必要を、させまつて感じているのではないかろうか。

いざれにしても、『孔子批判・秦始皇評価』のキャンペーントンの今後の展開とその方向については、大いに注目していかなければならぬだろ。

